

令和元年度 相模原市総合教育会議

日 時 令和2年2月14日(金曜日)午後4時00分から午後5時24分まで

場 所 相模原市役所 第2別館3階 第3委員会室

日 程

1. 開 会
2. 会議録署名委員の決定
3. 議 事
新たな大綱について
4. 閉 会

出席者(7名)

市 長	本 村 賢太郎
教 育 長	鈴 木 英 之
教育長職務代理者	小 泉 和 義
委 員	永 井 廣 子
委 員	平 岩 夏 木
委 員	岩 田 美 香
委 員	宇田川 久美子

説明のために出席した者

副 市 長	隠 田 展 一	教 育 局 長	小 林 輝 明
教 育 環 境 部 長	渡 邊 志寿代	学 校 教 育 部 長	細 川 恵
生 涯 学 習 部 長	大 貫 末 広	学 務 課 長	岩 崎 雅 人
教 育 環 境 部 参 事 兼 学 校 保 健 課 長	原 田 道 宏	教 育 環 境 部 参 事 兼 学 校 施 設 課 長	小 杉 雅 彦
学 校 教 育 課 長	篠 原 真	学 校 教 育 部 参 事 兼 教 職 員 人 事 課 長	農 上 勝 也
教 育 セ ン タ ー 所 長	淺 倉 勲	青 少 年 相 談 セ ン タ ー 所 長	水 野 正 人
生 涯 学 習 部 参 事 兼 生 涯 学 習 課 長	遠 山 芳 雄	文 化 財 保 護 課 長	関 みどり

スポーツ課長	高林正樹	図書館担当課長	郷司尚子
博物館長	兼杉千秋	企画部参事 兼企画政策課長	椎橋薫
こども・若者未来局参事 兼こども・若者政策課長	榎本好二		
事務局職員出席者			
教育局参事 兼教育総務室長 教育総務室主事	佐野強史 山本健太	教育総務室担当課長	江野学

開 会

本村市長 ただいまから、令和元年度相模原市総合教育会議を始めさせていただきます。

新たな大綱について

本村市長 本日の会議録の署名についてでございますが、小泉教育長職務代理者と宇田川委員を指名させていただきます。よろしくお願いいたします。

今回は、私が市長に就任してから初めての総合教育会議ということで、開催をさせていただきます。皆様どうぞ、よろしくお願いいたします。

本日の協議題についてですが、本年度末をもって「さがみはら教育大綱」が期限を迎えますことから、「新たな大綱について」としたいと考えておりますが、いかがでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

本村市長 ありがとうございます。

それでは、「新たな大綱について」を協議題としたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、はじめに、私の方からお話をさせていただきます。

新たな大綱につきましては、現在、教育委員会が策定に向け、取組を進められている、「第2次相模原市教育振興計画」の策定状況を見ながら検討することが、昨年度の総合教育会議の中で確認されていると承知しております。

この教育振興計画につきましては、来月の策定予定ということで、策定委員会における学識経験者や公募市民の方々の活発な議論を経まして、先月にはパブリックコメントの意見募集が終了したと聞いております。同様に、市の計画として、次期総合計画の策定に取り組んでおりますが、この中の教育分野につきましては、教育振興計画と整合を図りながら検討を進めており、私といたしましては、今後の教育施策については、皆様と基本的に同じ方向を向いているものと考えております。

このため、教育振興計画をもちまして、大綱とすることが望ましいのではないかと考えているところでございますが、本日の会議を通して、皆様と意見交換をしながら教育に対する考えや思いを確認し合えればと思っております。

それでは、はじめに、私の教育に対する思いについて、お話をさせていただきたいと思

います。

私も市長に就任して9か月が経ちました。この間、多くの市民の皆様と対話をしながら活動を行っておりまして、特に、先日は「まちかど市長室」という形で、鶴の台小学校にお伺いしまして、6年生の児童122人と対話をさせていただきました。何か質問がありますかと言ったら、半分近い児童に手を挙げていただいて、とても活発な意見交換ができたと思いますし、相模原教育も、これは未来があるなという思いがしております。鈴木教育長や小林教育局長をはじめ、委員の皆様のご理解と御支援によって、児童生徒がこれから夢や希望を持って、相模原市から羽ばたいていける、そういう教育をしっかりと応援していきたいと思っております。

今、御承知のとおり少子高齢化時代でありまして、私が市内の桜台小学校、相模台中学校に通っていた時と比べて、児童生徒数が非常に少なくなっております。国では少人数学級の法制化も進められていて、少人数学級がいいのではないかという声もありますが、一部では少人数学級でなくても大丈夫ではないかという声もあったり、最近いろいろな議論があるのではないかなと思っております。

そういった中で、私が一点注目したいのは、やはり貧困家庭の子どもたちが、どうしても支援を必要とする環境が多くあるということでありまして、私も、親の所得に応じて子どもたちの教育環境が変わることがあってはならないと思っておりますし、誰一人取り残さない教育というものを、この9か月間訴えてまいりました。

私自身も0歳からシングルマザーの家庭でして、そういった意味では決して裕福な家庭ではありませんでしたから、母が一生懸命働いて、私を育ててくれて、その母の姿を見て、自分も頑張っていこうと思っておりました。また、小学校の6年間は、知的障害者の同級生と登下校を一緒にし、また、6年間席も隣で、こういう友達を助けてあげたいなと思ったのが、私が政治家や市長になるきっかけの一つでありましたので、今、行財政構造改革の時代を迎えておりますけれども、やはり教育や子育てといった点には非常に力を入れていきたいと思っております。

選ばれるまちになっていくには、子どもたちが、これからの相模原市に夢を持って羽ばたいていける環境をつくってきたいと思っておりますので、子どもの7人に1人が貧困状態であるという全国的な課題がございますけれども、ぜひ、こういったことも改善できるような相模原市にしていきたいと思っております。また、全国学力テストの結果も、あまり一喜一憂することはないということが言われておりますけれども、正答率が他の政令

市と比較してなかなか数値が上がってこないとか、47都道府県と比べても大分下位にいるケースもありますし、あとは運動能力というのですかね、これに関しても相模原市は課題が多いというお話も伺っています。また、不登校も中学生のうち、800名を超える方々がいらっしゃるとか、小学生も200名を超える方々がいらっしゃるということで、この不登校に対する対策も非常に大事な話だと思っております。

野村前教育長ともいろいろな会話をする中で、不登校対策とか、人権教育が必要だろうという話もありましたし、それからICTを活用したプログラミング教育なども先進的に進めてきたという話を伺ってしまして、こうした幾つかの課題がございますので、しっかりとこれから子どもたちの環境をつくっていきたいと思っております。私も子どもが今、市内の小学校に通っているのですが、実は私ども夫婦の事情で引っ越したため、最初の小学校には1年生の1学期しかいなくて、1年生の2学期から違う学校に行き、今、5年生なのですが、なかなか友達ができなくて、いつも一人でいるというケースが多くて、子どもと会話をしているときに、今日も一人だったと聞くのは非常につらくて、でも、親としても何もできないのですね。自分の力でお友達をつくってお話をしていくことが大事だよと、伝えていて、少しずつ、話せる人もできたみたいなのですが、やはり私がいろいろな仕事をやってきた関係で、他の政治家の不祥事などの話もあったりして、子ども同士ですから、そうしたことで冷やかされることもあったようです。私も子育てをしていて、子どもから学校での環境のことを聞くときに、環境に溶け込めるかどうかというのは、自分の努力次第とも思っているのですが、学校の先生が悪いとかではないのですが、しばらく一人きりという時間が続いて、その話を聞くことが一番つらかったので、うちの子どもは不登校ではないのですけれども、恐らく、今、不登校でお悩みの御家庭でも、そういったお話というのはあるのではないかなと思います。

ですから、これから誰一人取り残さない教育というものを実践していただきたいと思っておりますし、この前行った鶴の台小学校でも、お友達が例えば1人であるとか、困っている人がいたら声をかける人間になってほしいということを、私は子どもたちにお願いをしたのです。そういう困っている人とか、悩んでいる人が周りにいたら、声をかけてあげて、そして一緒に遊ぼうよと、一緒にチームになろうよということをぜひ、率先してほしいなど。私も小学校、中学校、高校と、やはり一人きりでいる友達とか、例えば修学旅行で班に分かれるのですが、1人だけチームに入れなかった人に、一緒に行こうよと声をかけたりと、やってきたつもりなのです。ですから、子どもたちにもぜひ、そういった

ことを実践してほしいなと思っています。

そして、平成28年の津久井やまゆり園の事件から3年半が経ちましたが、本市は、改めて、国籍とか、性別とか、障がいの有無などによって差別されないような環境づくりという点で非常に全国から注目されていると思っています。ですから、津久井やまゆり園事件の教訓を生かして、差別をなくす、(仮称)相模原市人権尊重のまちづくり条例の制定を目指して取り組んでいきたいと思っておりますし、それから、パートナーシップ宣誓制度もこの4月からスタートする予定でありまして、こういったことも考えながら、人々がしっかりお互いの人権を認め合うようなことが必要だなと思っています。相模原市の教育も、いろいろな多様性が認められるものであってほしいなと思っていますので、そういった意味では、教育委員会とこども・若者未来局などが今後も連携をして、支援が必要な子どもたちを、引き続き支えていただいて、共生社会の実現に向けて取り組んでいただきたいと思っておりますし、また、そうした中で、子どもたちが人権を学んでいけば、きっとすばらしい大人に一步一步成長していくのではないかなと思います。

そして、子どもたちには、常に夢を語ってほしいと思っておりますし、将来夢がありますかという質問に対して、多くの子どもたちが、例えば、学校の先生になりたいですとか、お花屋さんになりたいです、パティシエになりたいですと、答えられるようになってほしい。それぞれの人生でいいと思っていますから、ぜひ子どもたちが自由に自分たちの夢が語れるような相模原の教育であってほしいということを願っております。

少し長くなりましたけれども、教育に関しては答えがなかなかないわけでありまして、いろいろなことに相模原市はチャレンジをしていきたいと思っておりますので、ぜひ皆様からも御指導をお願いしたいと思います。

そして、取り残さない教育の一つとしては、私は市長選挙でも言ってきたのですが、例えばクラスでわからない子どもたちが、わからないまま授業が進んでしまったら、わからない人はわからないと手を挙げられないのですよね。このわからない子どもたちがわからないと言える環境づくり、例えば習熟度別のクラス編成にしてみるとか、いろいろな取組もあるのではないかなと思います。誰一人取り残さない教育に今までもしっかり取り組んでいただいておりますが、引き続き、私たちはそのタスキを、次世代につなげていかなければならないと思っていますので、よろしく願いいたします。

私の思いにつきましては、ここまでとさせていただきます。

それでは、これから皆様の教育に対する御意見をお伺いしたいと思います、その前に

第2次相模原市教育振興計画（案）について、その内容を改めて確認させていただいてもよろしいでしょうか。

鈴木教育長 それでは、私から教育の基本的な部分についてお話をさせていただきます。

今、市長からいろいろ課題についてお話がございましたが、教育委員の皆様も、恐らく同じ認識でいると思います。子どもの貧困の問題、市長からいただいた言葉の中で、誰一人残さないというのは非常に重い言葉だと思っています。障害の有無、家庭環境が様々、そういう中でも誰一人残さない、こういうことに取り組んでいくのは非常に重要で、ぜひ市長と一緒に取り組んでいきたいなと。また、不登校のお話もございましたが、不登校については、学校に原因がある場合、先生とうまくいかない、あるいは学力の問題、いろいろな課題があります。

何より同じ思いだったなと思うのは、わからないことをわからないと言えること、これは私も、わからないことをわからないと言える、あるいは困っていることを困っていると言える、できないことはできないと言える、こういう環境をつくっていただきたいということを校長会でも申し上げました。本当に必要なことだと思っています。

それでは、まず、教育振興計画の概要の資料をおめくりいただきまして、1ページ目の上のところにありますとおり、今後の社会というのは、やはり非常に不透明で、AI技術の進歩が加速度的に早くなって、予測が困難なものとなると考えております。例えば、現在の小学生が社会で活躍する10年後、あるいは15年後は、今と比べて新しいことを知っている必要があると。

こうしたことから、計画では、教育施策を進めるに当たり、大切にしなければならないこととして、基本理念に、「共に認め合い 現在(いま)と未来を創る人」というものを掲げております。まず前段の「共に認め合い」というのは、今後どのような時代になっても一人ひとりが自分らしく輝き、多様な人々が共に生きていくためには、まず自分自身を見つめて、自分の良いところ、可能性に気付いて、短所も含めて、自分自身を認めていることが大切で、そうしたことを通じて、他人にも同様に良いところがあり、市長からもお話がございましたように、性別、国籍、障害の有無などの違いを持った、多様な人々がいることを理解し、皆が共に認め合い、つながり合い、支え合えることが大事、こうしたことから、まず、「共に認め合い」ということを置いたわけでございます。また、後段については、人間性と申し上げますが、AIによって多くの働き方が変わる中でも、人間ならではの感性を働かせ、先端技術を駆使しながら持続可能な未来を創っていくことが必要とな

る、こうしたことから「現在(いま)と未来を創る人」を置き、相模原市の教育が目指す人間像は、「共に認め合い 現在(いま)と未来を創る人」とさせていただいたわけでございます。

それから、具体的な取組につきましては、計画書に記載しておりますが、私としては、次世代を担う子どもたちが、将来厳しい状況に置かれても、たくましく健やかに成長できるよう、学力、体力だけでなく、他者とのかかわりの中で人の心を思いやれるよう、総合的な力を育むこと、そのためには学校教育の中核となる教員が子どもたちに、本当にしっかりと向き合えるよう、体制を整えていくこと、一人ひとりの子どもたちの教育的ニーズに応えること。また、地域全体で子どもや家庭を見守り、育てること。また、子どもだけではなく、市民一人ひとりが必要に暮らしていくために、文化やスポーツといった活動に親しめる環境づくりを進めることなど、人を大切にする視点を持って、教育の取組を進めたいと考えております。

計画の具体的な内容については、事務局から説明をさせたいと思いますが、よろしいでしょうか。

本村市長 はい、事務局からお願いします。

○小林教育局長 続きまして、概要版で説明をさせていただきたいと思います。

概要版の2ページを御覧いただきたいと思います。

計画の施策体系ということでございますけれども、御覧のとおり3つの基本方針がございます。それと13の目標、その下に35の施策を位置付けてございます。

まず、基本方針 につきましては、幼児期から高齢期までの縦の接続、こういったものを意識した、「生涯にわたる学びの推進」。基本方針 につきましては、学校、家庭、地域住民、行政が一丸となり教育に取り組む、横の連携というものを意識した、「オール相模原で取り組む地域教育力の向上」としております。

それから、基本方針 につきましては、今お話ししました基本方針 と を支える取組、基盤ということで、「多様な学びを支える環境の充実」ということにしております。

3ページを御覧ください。基本方針 、「生涯にわたる学びの推進」についてでございます。

目標1、「未来を切り拓く力の育成」でございます。子どもたちが未来の担い手として自分の役割を果たし、自分らしい生き方を実現するための力を身に付けることができるよう、取り組むものでございます。

本市におきましては、資料の中段に棒グラフがございます、全国学力・学習状況調査の結果では、子どもたちが自分の良いところに気付く、そういった自己肯定感が低いことや基礎的・基本的な学力に課題が見られる、こういう状況がございます。

このため、資料下段に施策を掲載してございますけれども、施策1のキャリア教育によりまして、自己肯定感や学ぶ意欲を高めながら社会的、職業的自立に必要な資質・能力を育むこと、それから、施策2の学びの連続性を意識した教育活動の推進、施策3の学力の向上に向けた取組の推進、施策4の豊かな心の育成、施策5の健康的な体づくりの推進に取り組むというものでございます。

4ページを御覧いただきたいと思います。目標2、「新しい時代に活躍できる力の育成」ということで、世界に目を向けて、様々な分野で活躍できる人材を育成するために、英語によるコミュニケーション能力の育成や、プログラミング教育を推進して、論理的な思考力ですとか、先端技術を使いこなす力、こういった情報活用能力の育成に取り組むものでございます。

目標3、「共生社会の実現に向けた取組の推進」につきましては、多様性や人権、命を尊重するといった子どもたちの心を育成するとともに、様々な困難や悩みを抱える子どもたちを温かく支援するために、一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援教育などに取り組むものでございます。施策8の人権教育の推進などによる、多様性の理解や人権意識の向上、施策9、10にございます、特別支援教育体制の充実、施策11の不登校やいじめなどへの対応、施策12の学びの継続に困難を抱えている子どもたちを学びの場へつなぐ支援、あるいは経済的な支援、こういったことによりまして、学びの機会の確保に向けた様々な取組を進めるものでございます。

5ページを御覧ください。目標4、「生涯にわたって学び生かす学習機会の提供」でございます。誰もが豊かな人生を送ることができるよう、学び始めるきっかけづくりですとか、生涯にわたって必要な知識、時代の変化に柔軟に対応できるスキル、こういったものを取得できるように、施策13の公民館などにおける学習機会の提供、施策14の学んだことを生かす機会の提供、施策15の学習機会に関する情報の発信に取り組むものでございます。

目標5、「生涯にわたり楽しむことができるスポーツ活動の推進」につきましては、誰もがライフステージや多様なニーズに応じて身近にスポーツを楽しむことができるよう、施策16の市民参加型のスポーツイベントや教室の開催、あるいは障害者スポーツの機会

の充実、施策17のホームタウンチームとの連携などを行い、子どもたちが楽しみながらスポーツを体験する機会の充実などに取り組むものでございます。

次に、基本方針の、「オール相模原で取り組む地域教育力の向上」についてでございます。

目標6、「子どもたちの成長を支える取組の推進」につきましては、子どもたちや学校の抱える課題の解決に向けて、子どもに関わる活動の担い手を育成するとともに、地域と学校がパートナーとして連携・協働する仕組みづくりなどを進めるものでございます。施策18のコミュニティ・スクールと地域・学校協働活動の一体的推進などによる、地域と学校の連携・協働や、施策19の子どもの居場所、遊び場づくり、施策20の青少年活動の推進などに取り組むものでございます。

それから、6ページを御覧ください。目標7、「学びを通じた絆づくり・地域づくりの推進」につきましては、地域コミュニティの維持・活性化に向けて、施策21の若者の参画に向けた取組の推進をはじめとした住民主体の公民館活動の推進や、施策22の市民主体の社会教育事業、スポーツ活動の促進、施策23の地域の歴史や伝統文化の継承に取り組むものでございます。

目標8、「家庭を支える取組の推進」につきましては、家庭環境の多様化ですとか、地域コミュニティが希薄化する中で、保護者が孤立しないよう、行政・学校・地域住民等が連携をしまして、家庭を支える仕組みづくりを進めるものでございまして、施策24の家庭教育支援の充実、施策25の子育て支援の推進に取り組むものでございます。

次に、基本方針の、「多様な学びを支える環境の充実」についてでございます。

目標9、「学校指導体制の充実」でございます。子どもたちの未来を切り拓く力などの育成に向けて、施策26の人間性、信頼性、向上心を兼ね備えた教員の確保、施策27の教員の資質・能力の向上を図るための研修の充実、施策28の教員の長時間勤務を改善するための働き方改革を推進に取り組むものでございます。

7ページを御覧ください。目標10、「学校教育環境の充実」につきましては、安全・安心で質の高い教育環境を確保するため、施策29の安全で快適な学校の施設・設備の整備、施策30の望ましい学校規模の実現に向けた取組、施策31の学校給食の充実、施策32のICT環境の整備を進めるものでございます。

目標11、「学校安全の推進」につきましては、自然災害、交通事故、犯罪などに備えまして、地域住民や関係機関等と連携をしながら、子どもの身を守るための取組を進める

とともに、学校における安全対策の徹底に取り組むものでございます。

目標１２、「生涯学習・社会教育の推進体制の充実」につきましては、学びを通じた人づくりや、地域づくりを促進するために、地域の人材や資源をコーディネートし、地域住民の主体的な学びを促すことができるような職員を育成するなど、生涯学習・社会教育の推進体制の充実を図るものでございます。

目標１３、「生涯学習・社会教育環境の充実」につきましては、生涯学習・社会教育環境の充実を図るための施設・設備などの改修、再整備などを進めるものでございます。

計画案の概要につきましては以上でございますけれども、この教育振興計画案につきましては、先月パブリックコメントの募集を終了いたしまして、現在いただいた意見への対応を整理しているところでございます。

今後、最終案を取りまとめ、来月に開催予定の教育委員会定例会で、「第２次相模原市教育振興計画」として策定する予定となっております。

事務局からの説明は以上でございます。

本村市長 それでは、皆様が考える教育施策については、この計画によって示されているものと思いますが、皆様がそれぞれお持ちの教育に対する思いについて、ぜひ伺いたいと思っております。

どなたか御発言をお願いいたします。

小泉教育長職務代理者 冒頭、口火を切らせていただきます。特に学校教育について、私の考えを述べさせていただけたらなと思っております。

学校教育であるとか、社会教育、また生涯学習、生涯教育は、人間、またはその人の人生に大きな影響を及ぼすものではないでしょうか。

中でも、学校教育の充実は、まさに今、変化が激しい時代であるからこそ、必須であると考えております。そして、学校教育の充実是最重点課題でもあると、私は思っております。変化の激しい未来に生き、夢ある未来を創るのは子どもたちです。そのためにも、教育振興計画にある各施策を着実に実行に移すということが必要であると考えています。言い尽くされた言葉、古い言葉でもありますが、教育は百年の計であるとか、未来への投資というような言葉もあります。魅力あるまちづくりの観点からも学校教育の充実は有効ではないでしょうか。

例えば、転居を考えるときに、いろいろなことを勘案するかと思うのですけれども、もしお子さんのいる家庭であれば、転居先の学校、また教育環境はどのようなのか、という

ようなところが大きな選択肢の要素の1つになるのではないのでしょうか。

そう考えると、選ばれる都市であるとか、魅力あふれる我が住まい、我がまちという観点からも学校教育が充実しているという相模原市であってほしいなと考えています。

概要版でいきますと、6ページの下の方の施策26から28までに関するのですが、教育は人とよく言われます。優秀な人材の確保と適正な配置、また先生方一人ひとりが子どもたちに向き合う時間の確保、この二つは最優先課題と私は考えております。

本村市長 はい、ありがとうございます。そのほか、いかがでしょうか。

永井委員 私も今の、概要版6ページの施策26から28までのことについてお話をさせていただきたいと思います。

本当に教育というのは、とても大切なことだと親としても実感しております。今後、どういう社会になるのかというのが、私たちにも読み切れず、不透明なところも多いかと思うのですが、まずICTの利活用が進むと、計算能力とか記憶力とか、言語の翻訳能力などはスマートフォンやタブレットが代わりに受け持ってくれるようになるかと思えます。

そうすると、人間はスマートフォンやタブレットなどを使いこなす能力、そして、自分で考えて取捨選択する能力、そして、自分の考えを他人がわかるように表現し、伝えられる能力、他人に共感できる能力、周りの人に感動を与えてモチベーションを高められる能力などが、より一層大切になってくると思えますし、当然、今までの教育とは身に付けるべき内容が大きく変わってくるかと思えます。

ただ、その中でももちろん、基礎学力を身に付けるということはとても大切なことで、後々、自分で学びたいと思ったときにも必要になります。

全ての児童生徒が確実に基礎学力を身に付け、思考能力が高められるように、教員がもっと子どもたちと向き合えることが必要になってくると思えますので、教員のレベルアップのためのサポートや研修に取り組むとともに、事務職員や、部活動のサポートをしてくれる人員を増やすなど、できる限り手厚い対策をとるべきだと思っています。

本村市長 はい、ありがとうございます。そのほか、いかがでしょうか。

鈴木教育長 今、小泉教育長職務代理者と永井委員からお話がございまして、やはり全国的に教員の働き方改革というのは課題になっています。企業でいえば、十分な時間がなくて、お客様に対応できないというような状況で、こういう企業というのは淘汰されてしまうだろうなと。今、教育委員会はそういう状況だと御認識いただければありがたく、国におきましても、教員の働き方について、時間外勤務時間に月45時間、年間360時間と

いう上限を設定しましたが、本市では小学校で月平均51時間程度、中学校で62時間程度と、これを非常に大きく超えている状況です。永井委員からもお話がございましたが、子どもに十分に向き合える時間がなかなかとれないと。

こういう状況で、本市では平成30年3月に、「学校現場における業務改善に向けた取組方針」を策定し、留守番電話の設置や、スクールサポートスタッフ、あるいは部活動指導員の配置、こういうことをやってきておりますが、個々の取組の効果はあるものの、なかなか抜本的な時間外勤務の削減には至っていません。また、もう一つ課題になるのが、教員の働き方に対する意識の問題で、もっとやれば子どもたちにさらに良い授業ができると思い、どんどん際限がなくなって、時間をとっているという現状もあるので、教員の意識改革も必要かなということを感じています。

また、保護者や地域の皆様の御理解も必要だということで、先日、「学校における働き方改革宣言」というチラシを作って、地域や保護者の皆様に教員の働き方改革がこういう理由で必要であるというものを配らせていただきました。

これも意味のある取組だと思うのですが、ぜひ、市長とも一緒になって教員の働き方改革の取組を進めていきたいと考えております。

本村市長 はい、ありがとうございます。そのほか、いかがでしょうか。

岩田委員 私は4ページの施策11、12辺りのところに関心がありまして、冒頭で市長が教育に対する思いということで話してくださって、先ほどの教育長のお話の中にも出てきましたけれども、全ての子どもが生まれ育った環境に左右されないということと、誰一人取り残されることがないように、それを社会で支えていくのだという考え方は、いろいろなデータから見た相模原市の現状を鑑みても、やはりとても重要なことだと思っています。これまでも、相模原市は不登校やいじめへの対応であるとか、子どもの貧困への対応というのをはじめにした、学びの機会の確保という、社会的に弱い立場の子どもたちの支援に取り組んできていて、私もこの取組をもっともっと前に進めていかなければならないと思っています。

本村市長 はい、ありがとうございます。そのほか、いかがでしょうか。

平岩委員 今、岩田委員からもお話がありましたところと少し関連するのですが、市長のお話の中にもありました、子どもの貧困問題なのですが、これについてまず、発言をさせていただきます。

これまでも給付型奨学金制度ですとか、それから子ども・若者未来基金の創設、無料学

習塾の支援などの取組をしておりましたけれども、これは今後も継続すべき取組だと考えております。学びの機会の確保というのが、施策12に挙げてありますけれども、学習意欲のある子どもに教育の機会を確保すること、これはとても大事だと思うのです。

ただ、現実問題といたしまして、いろいろな家庭環境がありますし、経済状態の違いがあるというのも、これは事実なので、制度だけではなくて、子どもを取り巻く環境に対して、どう対処していくかということ、具体的に考えなければいけないと思っています。

私の中学時代の話なのですが、非常に貧しい家庭の友人がおりました。友人は長女だったのですけれども、年下の弟や妹の世話をするために、親から、「勉強も部活もしなくていいから、弟たちの面倒を見てくれ」と言われていました。彼女は中学生ですから、何も疑問を持たずに、そして当たり前のように、高校の進学もしませんでした。それで、彼女とはその後も仲良くしておりましたけれども、後になってやりたいことがあっても中卒では仕事を選べないと言っておりました。

それから、もう一つ私の実体験で、これは高校時代ですけれども、当時は入学祝いに、大体の人は腕時計を買ってもらったのですが、多くの生徒がその腕時計をしている中で、うちはお金がないからと、マジックペンで腕時計を描いていた友人がおりました。彼は貧しさを隠すこともなく、堂々としていましたので、いじめられるというようなことはありませんでしたけど、こちらの場合には、経済的に無理をしてでも教育を受けさせたいという親の思いがあったのだと思っています。それが、彼を強く育てていったのだと思っています。

こういう経験の中から、教育振興計画の中にもあるとおり、教育分野における貧困が世代を越えて連鎖することのないように、教育を受ける機会の均等を図ること、これはとても大事だと考えております。これを実現するためには、子どもたちへの教育支援だけでなく、親に対して教育の大切さを伝えていくということも重要だと思っています。それと同時に、子どもたちには学力だけではなく、生きる力だとか、それから人生を豊かにする感性を身に付けるだとか、そういった機会も均等に与えられるべきものだと思います。

義務教育の期間の中の知識や経験というのは、自分自身を振り返ってみても、その後の人生の基本となっているものです。ですから、体験とか経験とかは多ければ多いほど、感じる力とか、思いやる心とか、柔軟性のある気持ちとかを育てていくと思いますので、こういった体験も、貧困だとか、環境に左右されずに、同じようにつくってあげたいと思います。

例えば、相模原市文化財団では、音楽家が学校に出向いて生徒にクラシック音楽などを聴いてもらう機会をつくっておりますが、これも非常に良い取組だと思っております。芸術に触れるというのは、家庭環境によってできる家庭、できない家庭がありますので、こういった機会をきちんとつくってあげること、生の演奏を聴くということは感性を育てる糸口になると思っております。こういうことは積極的に進めていかなければならないと考えるのと、それから読書というのも非常に大事だと考えておりまして、読書は経験を疑似体験するものですので、子どもの頃に読書をするを強く勧めたいと思っております。そういった意味では、教育委員会として、図書館の環境を整えて広く利用されるように取り組むこともこれは非常に重要なことだと考えております。

本村市長 ありがとうございます。

それでは、私からも一言お話をさせていただきますが、これまでも市長部局、教育委員会で、それぞれ貧困対策等の取組を進めておりまして、市長部局では、先ほどお話があったように、ひとり親家庭の学習支援、無料学習塾や、子ども食堂ですね。それから、子ども健全育成事業として、生活貧困世帯の中高生を対象に勉強会とか、子ども・若者未来基金の創設。教育委員会では、就学援助制度の充実や給付型奨学金の開始など、様々な取組を進めているところでございますが、皆様からお話をいただいたように、家庭環境によって教育が左右されてはならないというのは、本当に基本中の基本だと思っていますから、ここはしっかり取組を進めていきたいと思っています。

私はこれまで地方議員や国会議員も経験をしてきたのですが、市長になってよかったなと思うのは、いろいろな市民の生活をそのままリアルにお話を聴けるようになったことでして、その中には、市のサービスとしてできること、できないことがあったり、うれしいこと、悲しいこともありまして、鈴木教育長から昨年、電話で子どもの貧困の話の実例を聞いてですね、本当に親の所得から子どもの貧困に導かれてしまうようなことがあってはならないと思いましたが、全国的な統計でも、親の貧困が子どもの貧困の連鎖を生むというデータも出ていますが、相模原市はそれを脱却したいと思っています。

私も日本シングルマザー支援協会というところの顧問を昔からやっているのですが、例えば生活保護に陥っても、年収300万円をお母さんが稼いで、自立できるようにやっいていこうということで、以前、協会について加山前市長に紹介をさせていただいたことがありましたが、貧困がまた貧困を導くことがないようにしなくてはならないと思っています。

平成29年以降、教育委員会とこども・若者未来局で連携して取組を先進的にやっているとところは評価できるかなと思っています。さらに、取組を加速しなくてはならないなと思っているのと、あとは不登校、冒頭にお話をしましたが、非常に多くの不登校の児童生徒がいます。私も、昨年のゴールデンウィークに、3人の不登校の子どもの御家庭を訪問して、1時間半ずつ、合計で約5時間弱ぐらい、趣味の話など、友だちみたいにいろいろ話を聴きまして、この前、そのうちの一人のお母さんと会ったときに、また行きますよ、また話をしましょうねという話をして、「今度、市長室に連れて来ていいですか」と言われたので、どうぞという話もして。

いろいろな子どもたちも学校に行ける環境というか、チャンスをつくれるようにしてほしいと思っています。何かきっかけだと思うのですよね。もちろん、学校の環境とかもあるのでしょうけれども、先ほど私の娘の話をしたように、親が介入する話でもなく、子どもの力で何とか自分で切り開いて、友達関係をつくらないと、親が導いて仲良くなりなさいと言っても、これはなかなか難しい話ですから。

今後不登校対策というのは、しっかりした取組が必要だと思っています。今、800名の不登校の生徒がいて、200名の不登校の児童がいるということなのですが、これが年々減っていき、最終的にはゼロになってほしいというのが強い思いになります。

そのほか、何かございますでしょうか。

永井委員 今の不登校の話、私も小中学校時代、あまり学校が得意ではなかったので、風邪のふりをして、よく休んだりしてしまっていて、多分、親にも学校の先生も御心配をかけたと思うのですね。小学生のときは場面かん黙で、学校で一言も口をきけなかったという時代も何年もありましたので、お友達ができないというか、つukれないというつらさもよくわかるので、そういうことも、子どもたちのためになんとかしたいなという気持ちは人一倍あり、その観点からもいろいろ考えさせていただいております。

それで、これからの子どもたちが身に付けるべきなのは、周りの人と助け合いながら自分の力で生きていくことができる能力だと思います。組織の歯車になれば一生食べていけるという時代は終わってしまったので、言うことを聞く良い子を育てるような教育には意味がなくなってしまったと思っています。言われたことを上手にこなすという能力も不要だとは言いませんが、自分の興味を持ったことを突き詰めて学ぶために、そのサポートをしてもらい、自発的に学んで能力を伸ばした方がずっと楽しく意欲的に学べて、本人のためになるのではないかと思います。

全員に同じ宿題を出すのではなく、学力に応じて個別に宿題の内容を変えたり、宿題を廃止して自主的な家庭学習をするように工夫したりする、麹町中学校のような学校の取組が報道されて、高く評価されて、共感を得ていますが、これは一人ひとりを大切にする教育が求められているからだと思います。

誰かの指示で、ずっと苦しい努力を強いられてきた人は、努力をしない人とか、できない人を許せないことが多いのですね。自分だってつらかったのに、頑張って結果を出したのだから、他の人もそのつらい努力をするべきだと思ってしまっています。こういう人が教員とか、上司になると、子どもや部下には、そのつらさの連鎖がおきてしまうと思います。どこかで、そのような連鎖を断ち切って、わくわくしながら好きなことをして、楽しみながら能力を伸ばしていった方が良いと思います。特に教員には、わくわくが子どもたちに伝わるように楽しく仕事をしてほしいと思っていますし、できる限りそのサポートをする体制を整える必要があります。

私の大好きな詩で、絵本にもなっている、「教室はまちがうところだ」という、蒔田晋治さんという方の詩があります。ぜひ、検索してお読みいただきたいのですが、その「教室はまちがうところだ」という、題名からして子どもたちがすごくわくわくするような感じなのですが、間違えることを積極的に推奨し、誰も笑ったりばかにしたり怒ったりしないと言い切って、違うと思えばそう言っていいし、納得しなければ考えを曲げなくてもいいと言ってくれるような、失敗をすることを過度に恐れて消極的になりがちな現代の子どもたちにとっては、目からうろこが落ちるような内容の詩なのですね。

失敗は成功のもと、たくさん失敗することが学びになると思います。小学校のときになるべくたくさん失敗をして、自分の失敗が笑われないし、ばかにされない、他人の失敗を笑わないし、ばかにしないで、そこから自分を学ぶという体験を子どもたちには積み重ねてほしいのです。

失敗が怖いというのは、失敗が許されないとか、失敗するとばかにされるし、恥をかきたくないという考えを持ってしまうからで、失敗することによって人格まで否定をされるような気がするからだと思います。学校の教室が誰にとっても安心して失敗できる場になれば、不登校はなくなると思います。そのような場や空気を作り出すために先生が存在するのだと思いますし、教える能力も大切ですが、その前のクラスの雰囲気づくりが、先生の基本的な、全人格をかけて行う価値のある仕事だと思います。

本村市長 はい、ありがとうございます。

小泉教育長職務代理者 永井委員の話に関連したところで少しお話をさせていただくのですが、併せて先ほど市長からお話があった貧困対策であるとか、不登校対策というかわりの中で、キャリア教育の推進というところでお話をさせていただきます。

私が考えるキャリア教育は、子どもたちがそれぞれの個性であるとか、持ち味を最大限に発揮しながら、自立して生きていくために必要な能力や態度を育むことだと考えています。また、子どもたちが将来、社会の一員として役割を果たし、活躍できるよう、人間性を育成することも大切だと考えています。

そのためにも、キャリア教育の推進は施策の一番ということで、積極的に考えていくべきだと考えています。

本村市長 はい、ありがとうございます。他にございますか。

宇田川委員 私は、概要版の4ページの施策の9と10にあります、特別支援教育の推進と、また、その体制の充実のことについて少し申し上げさせていただきたいと思います。

まず、概要版の2ページのところに目標3として掲げられておりますように、共生社会の実現ということを考えた場合に、教育の果たす役割というのは非常に大きいと考えておりまして、特に冒頭の部分で市長がおっしゃった、多様性が認められる相模原市を実現するためにも、特別支援教育というものがすごく要になってくるのかなと考えております。

「共に認め合い」と、相模原市の教育が目指す人間像のところにもありますが、自分らしさ、自分らしく輝くことができるということを障害のある子どもに保証をしていくということがすごく大事で、そのためには、具体的には、特別支援教育において、まず障害のある子どもにも、様々なことに挑戦しようと思う、その意欲の源泉である自己肯定感というものを育てていくということもすごく大事だと思います。また、もう一点として、その自分らしい生き方というものを実現すること、障害があるから、自分はだめだから自分らしくは生きられないのではなくて、障害のある子どもでも自分らしい生き方を実現できるのだという、その意欲を育てることが非常に重要になってくるかなと思うのですね。

従来の特別支援教育ですと、どうしても個別の支援計画とかに基づいて、能力や技術の向上というものがすごく目指されるのですね。それで、健常児と同じようにできることを目指していくというところに、どうしても焦点が当てられがちなのですが、その部分も否定はしませんが、それ以上に、一人ひとりの児童生徒の特性を理解して、それを伸ばすという、全く概念を変えていくというか、その視点が大切だと思っております。

「みんなちがってみんないい」ということが、よく金子みすゞさんの詩を引用して言わ

れます。皆この詩を聞いたときに、ああ、確かにそうだよなって思うのですけれども、実際の教育現場で、「みんなちがってみんないい」ということが実現されているのかというと、なかなかそうとは言えなくて。どうしても授業の流れだったりというものについていけるように、皆違うのではだめで、皆と同じようにできることが望まれていて、障害のある子どもにとっては、それがとても苦しいことになってしまったりもするので、ぜひ、そういうことではなくて、真の意味で「みんなちがってみんないい」ということ、つまり、障害のある子どもでも、その子らしさというもの、その子どもなりの経験だったり、能力や考え方というものが尊重され、生かされるということを、まず特別支援教育の中で実現していく、保証していくことが大切で、それが共生社会の実現ということにもつながっていくのではないかなと考えております。

本村市長 そのほか、ございますでしょうか。

永井委員 宇田川委員のお話にも少し関連はあるのですけれども、施策の8、ページでいうと概要の4ページになります。多様性の理解や人権意識の向上に関するについて、少しお話をさせていただきたいと思います。

まず、命の大切さとか性とか人権については、人間が生きていく上でとても大切なことなのに、学校で学ぶ機会が少なく、もっと思い切って増やすべきではないかと思っています。

生きているということは、必ず誰かから生まれてきているということを、皆様忘れがちなのではないかなと思うのです。子どもを授かってから生み出して育てるまで、命の責任を負っているお母さんとか、子育てをする人というのは本当に日々大変なのですね。

まずは、そこを全ての人が理解して、尊重する必要があると思います。大切な命です。授かることも生まれてくることも当たり前ではなく、本当は奇跡に近い出来事なのではないかと思います。自分がここにいるということ、皆様がここに存在するということもすごく奇跡に近いことなのだと思います。それが実感でき、授かった命を大切にしたいと思える授業を学校でもっとするべきだと思っています。

命を大切に思うからこそ、伝染性の病気とか望まない妊娠を避けるための方法とか、性教育についても、相手への思いやりという視点から、変にオブラートに包むのではなく、正確な知識をきちんと教えて、将来に備えて身に付けさせるべきことだと思っています。

命を大切にするという点では、薬物やお酒、ギャンブルも含めた依存症の予防についても、中学生までに身に付けたい知識ですので、これもきちんと教えるべきだと思っています。

す。健康に生きていくために必要な知識というのは、やはり小中学生のときに身に付けると、その後の人生が違って来るかと思えます。健康に生きるための土台づくりとして、運動の能力が全国平均より高い低いで一喜一憂するのではなく、個人に見合った運動習慣を身に付けるための体制づくりも、もっと充実する必要があると思えます。

それから、人権についてなのですが、これは多くの大人が認識を改めなければいけないことだと思えます。世界標準に追いつくにはかなり大胆な教育改革が必要だと思えます。やはり子どものうちに人権感覚を身に付けるために、より良い人権教育をしている自治体があれば、その内容を学び、相模原市の教育に取り入れても良いと思えます。

特に日本では、障害のある方、外国籍の方、女性などへの根強い差別があり、これは本当に早急に解消を図る必要があると思えます。男女共同参画もジェンダーギャップの解消もなかなか進まず、子どもの人権の保障や多様な性の在り方を認めるべきなどの切実な訴えもなされていますが、これも残念ながら実現にはまだまだほど遠いという実感があります。差別をしている側の認識が甘かったり、根拠のない優越感なども働いてしまっているかと思えますが、これによって差別が解消されるという希望がなかなか持てないのが、現在の状況だと思えます。

これについては、相模原市が日本をリードして、差別解消を図る先進的な取組をするぐらいの気概をもって、市長部局、教育委員会が共に、積極的に取り組むべきではないかと思えます。

本村市長 そのほか、ございますか。

平岩委員 それでは、私も今の宇田川委員、永井委員がおっしゃった、目標3の「共生社会の実現に向けた取組の推進」の施策8、9あたりに関連して、お話をさせていただきます。

市長が最初に津久井やまゆり園のこと、差別のないまちづくりのことをおっしゃいました。それから、教育長の御説明の中にも、共に認め合う、そのような言葉が出てまいりました。最近、共生社会という言葉をよく耳にするようになりましたけれども、性別や年齢、国籍、病気、障害の有無、それから文化や生活習慣の違い、これらを認められるかどうかというのは、頭で理解するのも大切なのですが、やはり経験の有無というのが大きく影響していると思えます。思いやり、お互いの尊重というのは、相手の立場や気持ちを想像することから始まるのだと思えます。想像力があって、その上で認め合うことができるということで、社会に出る前に、子どもたちに多くの経験を積んでほしいと考えておりま

す。

インクルーシブ教育についても、これまで教育委員会でも話し合ってきましたが、これを進める上でもやはり、同じことが言えると思います。

今日は私の体験談ばかりで大変申し訳ないのですが、小学生の頃、クラスメートに知的障害の女の子がいました。私たちは4年生だったのですが、そのお友だちは、多分20歳前後だったと思います。会話や行動は幼稚園児と同じぐらいで、お母さんが毎日付き添って登校しておりました。体格は大人でしたけれども、机と一緒に並べて、授業中は私たちが通常の授業を受けているときに、お絵かきをしたりだとか、それから絵本を眺めたりしておりました。体育のときには手をつないで校庭に行きましたし、トイレにも一緒にいきました。お母さんはもちろんなのですが、今思いますと、当時の先生方も大変御苦労が多かったかと思えますけれども、もしかしたら今よりも先生も親も、それから子どもたちも何となく寛大で、緩い環境の中で一緒に学んだというか、今でいうインクルーシブ教育を当たり前のように受け入れていたのかもしれない。

この経験というのは、何十年経った今でも私の心に大変大きく残っておりまして、インクルーシブ教育を考えるときに、いつも頭に浮かんでいる経験なのです。障害に関する理解を進めるというのは、こういった体験によるところも多いかと思えます。

この経験については、教える先生方にも同じことが言えると思っております。教育に関する子どもへの熱い思いだけでなく、様々な経験や体験も豊富にお持ちの方が先生になってくれたらなと考えております。

それから、最後にもう一つだけ。今、世の中のスピードが速くなっていますが、教育に関してはスピードが最重視ではいけないと考えております。教育に関する行政の取組などは、スピーディーに改善していかなければなりません。人を育てるということに関しては、一人ひとりの成長スピードを見守ってあげること、それから、体験を通して、その子の年齢なりの喜怒哀楽などをじっくり感じる時間を急かすことなく持たせてあげること、それを許せる社会を創ることを忘れてはならないと考えております。

実際の教育現場で、こういったゆとりある時間の確保は難しいことも十分承知をしておりますけれども、教育委員として、そのような思いは常に持って、いろいろなことを考えていきたいと思っております。

本村市長 ありがとうございます。

それでは、私からも少しお話をさせていただきます。

最近、全国学力・学習状況調査の結果が話題になることが多くて、新聞紙を賑わした後にいつも保護者の皆様から、相模原の教育が心配だという声をいただくのですが、私は、もちろんテストの点数も大事なかもしれませんが、やはり生き抜く力というか、子どもたちがなぜ生まれてきたのだろうかということ、私は子どもたちに、みんな周りの人にたくさん愛されて生まれてきたのですよ、大事な命を一つしかみんな持ってないのだから、その命を大事にして頑張っていきましょう、ということ、よく子どもたちに向かって言うのですが、キャリア教育というのは、生き抜く力を養っていくのに非常に大事だと思っています。全国学力・学習状況調査の結果でいうと、本当に0・何ポイントとか、僅かな差で一喜一憂する部分があるのですが、それよりも私は、自己肯定感が一番大事だと思っていて、本市において、子どもたちの自己肯定感が少し低めだということ、これが一番心配しているところであります。

自己肯定感というのは、将来、先ほど私が言ったような、夢を持つことにもつながってくる話で、生き抜く力にもつながってまいります。子どものときに学力が飛び抜けて優秀だったお子さんや、少し勉強が苦手だった人たちが、今どうされているかというのはわかりませんが、大人になってから考えると、生きる力というのは非常に大事だと思っています。例えば何とか大学の何学部、何学科を出ているからといって、これで将来が保証されるわけではないのです。高校に行っていなくても、内閣総理大臣になられた方もいるわけですから、そういった意味では、生きる力というのは非常に大事だと思っていますので、自己肯定感の向上のためのキャリア教育は大事だと思っています。

それから、特別支援教育に関して、私は小学校の6年間、知的障害者の同級生がいたこともあって、インクルーシブ教育に非常に興味を持っておりまして、先ほど宇田川委員も言われましたけれども、障がいのある方が、障がいのない方々に合わせる必要はなくて、例えば大山丹沢という山がありますが、山の中にも、大きな木があれば、小さな雑草もあったり、小さな野草があったり、お花があるわけで、それぞれでいいと思います。それぞれの人生でオンリーワンの生き方でいいと思っていますから、その人なりの頑張りがあれば、そのことを皆で「すごいね」と言ってあげることによって、将来に向かって自信が付くのではないかなと思っています。

また、津久井やまゆり園で起きた非常に痛ましい事件は、二度とあってはならないし、この前、津久井やまゆり園の話が鶴の台小学校の児童に知っていますかと聞いたら、皆知っていると言っていましたけれども、そういうことが相模原市で起きたことは非常に残

念な話だし、あつてはならない話なので、これを教訓として、差別のない、相模原市の人権の条例づくりに取り組んでいきたいと思っています。ぜひ子どもたちにも、人権を学んでいただいて、それは、生きる力につながっていくと思うし、将来、人を差別しない大人になってほしいなと思っています。

それでは、また進めさせていただきますが、御意見がある方。

宇田川委員 今の市長のお話に関連して、障害のある子どもにかかわってきたある方が、その障害のある人たちについて、「この子らに世の光」をではなくて、「この子らが世の光に」ということを謳っているのですけれども、障害があるから、力がないから、弱者だから助けてください、支えてください、与えてくださいというわけではなくて、この人たちだって世の中の光になることができるのだということで、こうした考えは、共生社会の実現というようなことにつながっていく、インクルージョンということにつながっていくのかなと思いますので、その辺のところもしっかり考えながら進めていければなと思っています。

それで、概要の5ページの施策18の地域と学校の連携・協働に関してなのですが、豊かな地域の中には経験豊富な人材がたくさんいらっしゃると思うので、その豊かな地域の人材を活用して、教育を支えていく担い手づくりというものが非常に大切になってくるかな、ポイントになってくるかなと考えております。実は、都内の江戸川区の自治体で、人生大学という、区民の人たちに学びの場を提供するものがあり、私も以前、幼児教育の専門家として携わっていたのですが、そこで授業をする中で、幼児教育というものは、教員が子どもたちに何かを教えるのではなく、まさしく生きる力につながっていくような、子どもたちが興味関心を持ったところから、主体的な活動を通して、子どもたちが学びというものを自分でつかみとっていく、作り出していくためのものだというような、幼児教育の在り方の基本のことについてお話をしましたら、定年退職をして、人生大学に学びに来ていたある男性で、仕事をしている最中は全然家庭も顧みず、子育ては奥さんに任せきりだったけれども、これからは子どもの教育というものが大切になるから、子育てとか子どもの教育について考えたくて来たという方がいらしまして、その幼児の教育の在り方を聞いたときに、すごく感動してくれた一方で、小学校の教育はどうなっているのだ、本当にそのような主体的な活動になっているのかということをおっしゃいました。

そこで、実際に学級崩壊があったところをうまく頑張って立て直して行って、そのクラスを取り壊して、その学校の児童は学校の教員全員で育てていくのだというような視

点で学級崩壊を乗り越えていった先生のところに一緒に見学に行ったりしたのですが、その男性もそうした学びの場を終えた後に、実際に区の小学校の方にボランティアに行くようになって、結局、本当に子どもたちからも慕われ、担任の先生からも、今日は来てくれないと困るんだけどというような、大事な存在になっていったという例がありました。

そういった豊かな人材というものがまだ眠っていることもあると思うので、ぜひ何か活躍の場というか、そういったことを生かしていけるようなシステムづくりみたいなものも具体的にできたら良いかなと思っております。その結果、多様な人たちが教室に入ってくると、子どもたちも多様な人との出会いによって、その人との関係性の中では自分の居場所を見つけられるということも出てくると思うのです。ですので、施策19の方で子どもの居場所、遊び場づくりということが挙げられていますけれども、もちろん、その場の空間の居場所というものも大切なのですけれども、多様な人たちが、そういうふうに教室の中に入り込んでくることによって、その人間関係における子どもたちの居場所というものもできるのかなと考えています。

本村市長 ほかにございますでしょうか。

小泉教育長職務代理者 宇田川委員のお話にさらにつけ足しといいますか、学校現場のサイドからその地域との連携であるとか、家庭教育の支援の充実ということで、施策でいきますと概要の5ページの施策18、6ページの施策24に当たりますけれども、今までのお話のように、今、子どもたちを取り巻く環境は非常に変化しています。また、併せて個別にいろいろな課題を持っているお子さんもいらっしゃいます。となると、学校現場、学校だけでその子を支援するというのは非常に限界がありますので、やはり家庭教育であるとか、また地域との連携が非常に大事になってくるのかなと。

それから、市長部局の施策のところでいうと、福祉関係は今、学校教育とかなりタイアップをしていますけれども、ときには医療関係の部署や機関と連携をとりながら、子ども一人ひとりのニーズにあった、教育を展開できるといいのかなと考えております。

本村市長 ありがとうございます。

鈴木教育長 先ほど市長から、愛されて生まれてきた、そういう自己肯定感が大事だというお話を伺いました。本編の49ページになるのですが、市長がおっしゃるとおり、家庭での教育に関しては、自己肯定感の育成という点に本当に注目しております。この自己肯定感とは学びに向かう力、夢や目標に挑戦しようと思う意欲の源泉です。

先ほどお話がございましたとおり、本市の子どもたちの自己肯定感は、全国に比べやや

低く、この計画を策定する過程で、昨年度小中学生の保護者に対するアンケート調査を行った中で、子どもの良いところを褒めるなどして自信を持たせるようにしているかという質問をした結果、資料の中段の棒グラフのとおり、そうした保護者が33.6%、約3人に1人しかおりませんでした。子どもを褒めること、認めることは、自己肯定感を育成する上で、非常に重要でございますが、しつけに比べて自己肯定感育成の大切さを理解している大人が意外と少ないという結果でした。

この自己肯定感の育成については、学校教育においては、先ほどございましたとおり、今後、キャリア教育を通じて取組を積極的に進めていくことを考えておりますが、実際は学校に上がる前の段階のアプローチがとても大切だと考えています。

そういったことについて、先ほど平岩委員からありましたが、親への教育、保護者が学ぶ機会の充実が必要だと考えています。家庭教育の在り方については、なかなか行政があしる、こうしろということができない難しさがありますが、今後、子育て支援を担う、こども・若者未来局と連携をした取組を、一層進めていきたいと考えております。また、教育委員会としても、より効果的な家庭教育支援の展開について考えてまいりたいというところでございます。

本村市長 ありがとうございます。そのほかいかがでしょうか。

岩田委員 今教育長が話してくださったことや、皆様が今まで話してくれたことの中で、誤解が生じないように伝えたいなと思ったのは、市長も御存じだと思うのですが、津久井やまゆり園の話が出たときに、我が子を施設に入れているということで、親へのバッシングが出たということがあって、家族の問題とか、家庭の問題を出してくるときに、そこをすごく丁寧に見ていかないと、子どもを施設に入れる親は頑張らない親というふうに批判が出がちなので、やはりそこところは丁寧に見て、私たちは子どもとその家族を支援していくようなことを考えていきたいなと思っています。

それと、市長へ質問したいと思ったのですが、この教育振興計画はいずれも重大な施策が盛り込まれていますが、一度に全部、この施策を展開していくのは難しい部分があるのだろうなと。今日の意見交換なども踏まえて、市長としては今、何が特に大切だってお考えなのか、その辺りを教えていただきたいなと思います。

本村市長 それでは、私への質問なのでお答えさせていただきます。

これまで述べてまいりましたが、とにかく家庭環境に左右されずに、子どもたちにあらゆるチャンスをつくっていきたいと思っております、そのためには先ほど言った自己肯定

感が非常に大事だと思いますし、よく教育は学校任せというか、学校の責任にされがちですが、まず基本は家庭、地域だと思っています。私自身、今49歳ですが、幼少時代から母と暮らしていて、近所の商店街や自治会の人、近隣の人たちに、ときには叱られて、ときには褒められて、そして今日があると思っていますのですね。私はそういった意味では、多くのお子さんたちに、自分が受けてきた、大人からいただいた愛情、これを72万人の市民の中にいる児童生徒に対しても、高校生に対してもそうですが、あらゆる皆様に注いでいきたいなと思っています。私が受けてきた幼少時代の思いとして、本当に多くの皆様に支えられたという気持ちがあるので、それを今度、私も市長として、また一社会人として、社会に返していきたいと思っています。

今日は皆様から活発な意見をいただいて、非常によかったなと思っています。

相模原市は、神奈川県とか、横浜市とか、川崎市がやってきた事業をいつも後追いしている4番手のまちだったと感じています。しかし、これから相模原の教育を実践していただく上で、全国でやっていないことだって先んじて挑戦していくべきだなと思っていますし、受け身になってはいけないと思うのですね。チャレンジしていくことによって、失敗もあるのかもしれませんが、失敗してはいけないのかもしれませんが、それを恐れていたら何もできません。私は、相模原市をチャレンジするまちに変えていきたいと思っていますし、そういう力をぜひ、教育委員の皆様からもいただいて、教育委員会やこども・若者未来局、子どもたちに携わる皆様と一緒に、わくわくする相模原市をつくっていききたいなと思います。

教育というのは、本当にかげがえのないものだと思いますし、行財政構造改革という、厳しい改革もこれからやっていきますが、その中でも、真に必要な行財政サービスということで、提供しなければならないその一番手に教育とか、子どもへの支援というのが挙がるのではないかなと思っています。

しっかりとその視点を持って、様々な事例の参考もいいのですが、ぜひ新しい発想があったら私も出していきたいと思っていますし、チャレンジできる相模原市にしていきたいと思っています。

それから、障がいのある子どもたちに関して、先日、障がい者の皆様の成人式に初めて行き、そこにはいろいろな障がいのある方がいました。皆この相模原市から小学校、中学校を卒業して、大人になっていくのですが、親御さんたちの心配として、順番を考えると親御さんが先に天国に行かれるケースが多いでしょうから、そうした中で子どもを残して、

死にきれいなという声もよく聞きました。

ですから、障がいのある子どもたちが大人になってから働ける環境というものもつくっていかねばいけないと思っています。特に障害者雇用率について相模原市は低かったので、反省をしなくてはいけない部分もあり、今年の相模原商工会議所のあいさつで、障害者雇用を積極的に中小企業でも取り入れてほしいということをお話させてもらったのですが、例えばテレワークとか、そういうこともやって、障がいのある方が、おうちでもできる作業があるのではないかなと思いますので、積極的にそういった取組ができればなという思いがあります。

お話したいことがたくさんあるのですが、最後に、私も周りの子どもたちを自分の我が子のように思っていける年齢になってきたのと、独身のときと結婚して子育てをしているときでは大分違うなという思いもあり、どの子も取り残せないという思いをしている大人に自分も少しずつ成長していますので、皆様と一緒にこれから学んで、さらに成長していきたいなと思っております。

それでは、ほかに何かございますでしょうか。

小泉教育長職務代理者 まとめ的な話になってしまうのですがけれども、先ほど市長は誰一人取り残さないというお話でした。私自身は、教育に携わる姿勢として、先輩の言葉でもあるのですが、一人ひとりの子どもを見逃さない、一人の子どもも見放さない、そして一人の子どもも見捨てない。そのような姿勢、意気込みでバランスの取れた施策の展開に、教育委員として取り組んでいきたいなと考えております。また、生涯学び続けられる環境整備、こういった観点からも、冒頭に市長がお話されていましてとおり、相模原市教育振興計画をもって大綱として進めていただきたい、そうであってほしいと考えております。

本村市長 ありがとうございます。そのほか。

鈴木教育長 今日、市長といろいろな点で意見交換ができて、教育委員会としても、本当に良かったなと思っています。ありがとうございました。

チャレンジしていくというのは、確かに必要なことで、相模原市は72万人、今日まさに生まれてくる子どもから、かなり高齢者の方まで、それから朝早くから働いている方もいれば、先ほど市長がおっしゃったように障害のある方など、いろいろな方がいる72万人で、教育委員会はその方たちを支える教育に対して、責任を持たなくてはいけないと思っています。ただ、公教育は税金を使う以上、社会の要請に応えていく必要がある

という点で、できること、できないことがあります。いろいろ今日お話しいただいた中で、市長の思い、誰一人取り残さない教育を進めてほしい、あるいは貧困対策、人権、これらについて、いろいろ意見交換ができました。

ぜひ、今後も教育委員会と市長が連携をしながら、いろいろな取組を進めてまいりたいと思いますので、ぜひよろしくをお願いします。

本村市長 ありがとうございます。ほかによろしいですか。

教育につきましては、私としても非常に重要な施策の一つだと考えておりますし、一番大事だという視点であります。

教育委員会におかれましては、新たな教育振興計画に基づき、今後の教育の発展に向けて、積極的な取組をお願いしたいと思っております。

私としても引き続き、教育委員会の皆様と、今、教育長からもお話がございましたが、一体となって、一層力を入れて取り組んでまいりたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

本日の協議題につきましては以上となりますが、皆様から最後に、何か特にこのことは言っておきたいとか、ありましたらいかがでしょうか。大丈夫ですか。

(「はい」の声あり)

本村市長 それではありませんので、これをもちまして、本日の会議を閉会とさせていただきます。

長時間にわたりまして教育長、そして教育委員の皆様には貴重な御意見を賜りましたことを御礼申し上げまして、この会を閉じさせていただきます。

ありがとうございました。

閉 会

午後5時24分 閉会